

聖書：使徒4：23～31

説教題：大胆に語らせて

日時：2013年7月7日

釈放されたペテロとヨハネは、仲間のところへ行きます。彼らはこの二日間、どんなことを経験したでしょうか。4章1節からの部分に記されていたように、彼らは足のなえた男の癒しをきっかけとして、集まった人々に説教していました。その最中に二人は宮の守衛長らに逮捕・留置され、翌日にはユダヤの最高議会サンヘドリンに引き出されて尋問をされました。そして今後、誰にもイエスの名によって語ってはならないと厳しく命じられ、脅されました。こうしてイエス様が天に上られた後の教会に対する最初の迫害が起こりました。

もし私たちがここにいたらどうでしょうか。聖霊の注ぎを受けて素晴らしい祝福に生かされ始めたばかりなのに、もう雲行きが怪しくなって来たと不安になったのでしょうか。自分たちもイエス様がそうされたと同じように迫害され、さらには十字架に付けられるのだろうか、遅くならない内に早くエルサレムを後にした方が良いだろうか、と考えたのでしょうか。ところが彼らは違いました。彼らが最初にしたことは、心を一つにして神に向かって声を上げること、すなわち祈りでした。実にこれこそ今日の箇所を中心テーマです。その祈りが24～30節まで、今日の箇所の大部分を占めています。彼らはこの祈りを通して祝福され、さらに豊かに強められて行ったのです。

なぜ彼らはこのように祈りへと向かったのでしょうか。それはある意味で彼らがいつもしていることだったからと言えます。2章42節：「彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた。」しかし別の面から見れば、この時、教会が置かれたこの危機的状況が、この祈りを促したとも言えるのではないのでしょうか。

私たちが日々様々な困難、試練、問題、トラブルに直面します。しかし今日の箇所から思われることは、それはただ落胆すべき時ではないということです。それはむしろ祈って神による力を体験し、その祝福に生きるように神が招いておられる時である。今日の箇所の教会は、危機的な状況にぶつかって祈り、祝福されて行きました。私たちがもし難しい状況に直面しているなら、それは神に祈り、神の力によって生きるようにと神が招いておられる時なのです。個人の生活でもそうです。祈る生活は一人でも始めることができます。と同時に彼らのように、兄弟姉妹が集まって共に祈ることもそうです。彼らはみな心を一つにして主に祈り、その祈りを通して豊かに祝福を受けて行ったのです。

では彼らはどのように祈ったのでしょうか。次に祈りの内容を見て行きたいと思います。彼らの祈りから改めて教えられることは、彼らはまず神をしっかり見上げているということです。祈りの最初に、まず神への信仰告白が来ています。あるいは神の約束を思い起こすことが先に来ています。しばしば私たちは祈りの中で自分の必要だけをベラベラ述べてしまいやすい。神様、ああしてください、こうしてください、守ってください、支えてください、・・・色々願い事を並べますが、神をほとんど見ていない。ただ自分と自分の状況だけを見つめて、独り言を言っているような祈りをしてしまう。しかしそれでは神に基礎を置く力強い祈りになりません。

彼らの祈りの特徴は、最初の言葉に現れています。24 節の括弧の中の最初の「主よ」という言葉は、通常の「主」という言葉とは違って力強い支配者、君主を指す言葉です。彼らはこの呼びかけの言葉それ自体の内に、神こそ真に力強い主権者であるとの告白をしているのです。この時は祭司長や長老たちといったユダヤ人当局者が力を持っているように思われる状況でした。彼らに物事をすべて決める決定権があるかのように思われる状況でした。しかしそのただ中で新約の教会は、私たちの神こそ、真の主権者であると告白し、その方の名を呼んだのです。そしてこの神が「主」であることについて二つの具体的な告白をしています。

その一つ目は 24 節後半にあるように「あなたは天と地と海とその中のすべてのものを造られた方です。」ということです。いかに目の前の人間たちがある権力を持っていようとも、創造者なる神との比較にはなりません。主なる神は無からすべての物を造り、存在せしめたお方。あらゆるものをかくあるようにされた圧倒的な支配権を持つ主です。

もう一つ、「主」という言葉で彼らが考え、告白したのは、奇しい摂理における主の絶大な主権です。25～26 節で彼らは詩篇 2 篇を引用します。そこでは異邦人やもろもろの民、また地の王たちや指導者たちが、こぞって主なる神と主が立てたメシヤに反抗することが述べられています。と同時に、その彼らの企みは虚しいものでしかないこと、結局彼らの目的は達成されないこと、神の主権こそが勝ることが述べられています。この詩篇がまさにイエスにおいて成就した、と新約の教会は告白したのです。27 節にあるように、ガリラヤとペレア地方の王と言うべきヘロデ、またローマの地方総督であり、指導者と言うべきピラトは、異邦人またイスラエルの民と一緒に、神が立てたメシヤであるイエスに逆らい、この方を十字架に付けました。彼らは自分のしたい通りのことをしました。しかしそれは詩篇 2 篇が述べるように、虚しいわざでしかなかった。彼らのそういった反抗は、神にとって少しもハブニングではなかった。むしろ 28 節にあるように、彼らは神があらかじめお定めになったことを行なっただけだったのです。イエス・キリストが私たちの身代わりに十字架について、私たちの救い主となるという神の計画を成就するために仕える結果となってしまったのです。何という、人間の考えの次元をはるかに超える神の主権でしょうか！2 章 23 節、3 章 18 節。

このように詩篇 2 篇を引用することによって、当時のクリスチャンたちが告白しているのは「神の絶対主権の教理」です。すなわち神の御手の外で起こっていることは一つもないということ。あのイエス様の十字架の出来事さえ、神にとって想定外のことでなかった。いやあれはもっと積極的な意味で神ご自身がご計画されたことだった。また神がダビデの口を通してあらかじめ語り示しておられたことだった。人間はそんなことはつゆ知らず、自分たちの好きなように悪を行ないました。これによって邪魔者を葬り去った、我々こそ強い者たちだと思っていた。ところがそんな彼らを用いて、神はご自身が以前から語って来られた計画を成し遂げ、私たちの救いという益を取り出されたのです。

私たちは自分が直面するあらゆる困難にも、この真理を当てはめるべきでしょう。たとえそれがどんなに難しい状況でも、それは神と無関係に起きて来たことではない。そこにも神が何らかの計画を持っておられる。私たちの目にはそれがそうだとは思われません。ただ苦しいだけのことのように。ただつらいだけのことのように。ただ早く過ぎ去って欲しいだけのことのように。

です。しかし私たちがそこで思うべきことは、そこにおいても真の主権を持っているのは神であられるということです。今、私にそれが何であるか分からなくても、神がここにも何らかの御心を持っていてくださる。大切な意味を持っていてくださる。この真理にしっかり立つ時に、私たちを取り巻く状況は、何と違ったものとして見えて来ることでしょうか。

この信仰告白に基づき、彼らは祈りました。一つ目は「主よ。いま彼らの脅かしをご覧になってください」。もちろん主なる神はすべてを見ておられます。しかし確かにそのことをよくよく見てくださり、あなたのふさわしいさばきを彼らの上に行なってください、ということです。二つ目の祈りは「あなたのしもべたちにみことばを大胆に語らせてください。」 人間的に考えれば、ユダヤ人当局者が迫害を始めたというのは恐ろしい状況です。しかし神の絶対主権を信じる彼らは、ただ恐れ震え、縮こまったのではなく、神が自分たちの上を持っている御心にしっかり生きることができるように、神の御前で忠実な歩みをささげることができるように祈り求めたのです。そして三つ目の祈りは 30 節にあるように「御手を伸ばしていやしを行なわせ、あなたの聖なるしもべイエスの御名によって、しるしと不思議なわざを行なわせてください。」 これは使徒たちが伝える福音が本当に神からのものであることを示す証拠としての性格を持つものです。これは今日とは違ってまだ聖書が完結していない時代に特に必要とされたものです。これらのしるしによって、あなたの御言葉の真実を確かなものとしてください、と彼らは祈ったのです。

この祈りの結果はどうだったのでしょうか。まず彼らがこう祈ると、その集まっていた場所が震い動きました。これは祈りに対する神の応答でした。確かにわたしはあなたがたの祈りを聞いた、またあなたがたと共にいるという臨在のしるしです。このように人が立つ地面を足元から揺り動かす力を持っている主が、私たちと共におられると知るとは、何という非常な確信を彼らに与えるものだったのでしょうか。二つ目の結果は「一同は聖霊に満たされ」ということです。前回、4 章 8 節でも見ましたが、これは聖霊の新しいフレッシュな注ぎです。ペンテコステの日の聖霊降臨によって、エルサレムにいたクリスチャンたちみなが聖霊の注ぎを受けましたが、聖霊は私たちが日々目の前にする新しい必要に応じて、さらに豊かに臨み、上からの力を加えてくださるのです。ですから私たちはその都度その都度、このフレッシュな聖霊の満たしを求めるべきですし、またこれを期待して歩むべきなのです。そして祈りの結果の三つ目は 31 節最後の「神のことばを大胆に語り出した」ということ。これこそ彼らが祈ったことです。「大胆に語らせてください」と祈ったことへの答えとして、彼らは確かに聖霊の力によって神のことばを大胆に語り出したのです。彼らは決してもともとそういう人たちではありませんでした。ペテロも普段は何者かであるように豪語していても、いざという時には臆病虫となって震え上がってしまうような人でした。しかしそんな彼らがみな、聖霊に強められて、大胆に語り出したのです。

聖霊が下った新約の教会がさっそく様々な問題に直面したように、今日の私たちも日々、様々な問題・課題に遭遇します。キリストへの信仰を持ったらすべてがうまく行くわけではありません。この世は天国ではなく、まだ私たちは地上にいます。それに私たちは主に従う者として、主がこの世から憎まれ、迫害されたように、その主に従うがゆえの、この世での生きる難

しき、戦いがあります。しかし今日、私たちが心に刻みたいのは、私たちはそれらの問題を前にして、ただ落胆しているべきではないということです。それは私たちが真の主権者にその問題を持って行くための時であるということです。神が私たちを、祈りを通し、聖霊の力によって生きようと招いてくださっている時であるということです。私たちはそのことを見て取って、改めて希望を持って、祈る生活に進みたいと思います。私たちはこの祈りを通して、自分の力を越えた聖霊の力に生かされることができます。物事を前にして、ただ恐れ思い煩うのではなく、すべての上に絶対主権を持つ神を信じて、神に忠実に歩むことに大胆である者へ導いて頂くことができます。そして私が今置かれている状況を通して、また教会を通して、神の国を広げ、御国の福音のさらなる前進のために用いていただく歩みへ進むことができるのです。